

『三国志』の世界を愉しむ——古典からサブカルチャーまで——

講師 加藤徹

劉備にまつわる名場面 平成二十八年二月十七日

りゅうび【劉備】(161 ~ 223) 中国、三国の蜀漢(しよつかん)の初代皇帝(在位 221 ~ 223)。字(あざな)は玄德、諡(おくりな)は昭烈皇帝、河北の人。前漢景帝の子孫。関羽・張飛らとともに黄巾の乱鎮圧に尽力。諸葛亮(しよかつりよう)の天下三分の計により、呉の孫権と結んで魏(ぎ)の曹操を赤壁で破り、蜀を平定。221年成都で帝位につき国号を漢と号し、呉・魏と天下を争った。

大辞林 第三版の解説

大辞林 第三版の解説

とうかい【韜晦】(名) スル 「韜」はつつみかくす、「晦」はくります意) 自分の才能・地位・身分・行為などをつつみかくすこと。人の目をくりますこと。「互に深く一して、彼豪族らに油断をなさしめ/慨世士伝 逍遙」

【劉備、関羽、張飛】十八史略

涿郡劉備、字玄德、其先出於景帝。中山靖王勝之後也。有大志。少語言、喜怒不形於色。河東関羽、涿郡張飛、与備相善。備起。二人從之。

涿郡(たくぐん)の劉備、字は玄德、其の先(せん)は景帝より出づ。中山靖王(ちゆうざんせいおう)勝の後(のち)なり。大志有り。語言、少なく、喜怒、色に形(あら)はれず。河東の関羽、涿郡の張飛、備と相善(よ)し。備、起る。二人、之に従ふ。

頼山陽「詠三国人物十二絶句」

一、先主

長腕双垂閑不勝 結髻織履枉多能 幃幃一樹柔桑綠 展到蜀山青万層

長腕 双つながら垂れて 閑に勝へず
髻を結び履を織りて 枉しく多能なり
幃幃たる一樹 柔桑 緑なり
展べて 蜀山の青きこと万層に到る

先主⇨劉備のこと。両腕は膝まで届くほど長く、耳も人並みはずれて大きかった。

幃幃一樹：⇨劉備の一族が住む邸の角に大きな桑の木が生えていて、皇帝の乗る屋根付き馬車のような形に茂っていた。幼い劉備は「将来、きっとこんな馬車に乗れるような人物になってやる」と宣言した、という。

【大意】

蜀漢の皇帝となった劉備は、若いころは不遇だった。人並みはずれた長い腕、という異相をもちながら、生活のためムシロやわらじを編んで暮らしていた。彼が子供のころ、邸に生えていた桑の木の若葉にかけた夢は、後に見事に成功して、蜀漢の国土に青青と広がる山林にまでつながった。

「評」子供のころの夢を捨てきれない人が、意外と大成するものだ。

【参考】正史『三国志』蜀書・先主伝…先主少孤、与母販履織席、為業。舍東南角籬上有桑樹、生高五丈余、遥望見、童童如小車蓋。往来者皆怪此樹非凡、或謂当出貴人。先主

少時、与宗中諸小兒於樹下戲、言「吾必当乘此羽葆蓋車」。叔父子敬、謂曰「汝、勿妄語。滅吾門也」……

「参考」篠崎小竹は、劉備が頼山陽に罵られなかったのは大いなる幸いだ、と評している。

川柳

「桃の木の下で文殊の知恵を出し」柳多留32篇

「桃園で関羽一人が飲んだよう」41篇

「翼徳も知らずに張飛酒が好き」91篇

(吉川英治『三国志』桃園の巻より)

久しく見ない町の暮色にも、眼もくれないで彼は驢を家路へ向けた。道幅の狭い、そして短い宿場町はすぐとぎれて、道はふたたび悠長な田園へかかる。

ゆるい小川がある。水田がある。秋なのでもう村の人々は刈入れにかかっていた。そして所々に見える農家のほうへと、田の人影も水牛の影も戻って行く。

「ああ、わが家が見える」

劉備は、驢の上から手をかざした。春うすずく陽ひのなかに黒くぼつんと見える一つの屋根と、そして遠方から見ると、まるで大きな車蓋のように見える桑の木。劉備の生れた家なのである。

「どんなに自分をお待ちなされておることやら。……思えば、わしは孝養を励むつもりで、実は不孝ばかり重ねているようなもの。母上、済みません」

彼の心を知るか、驢も足を早めて、やがて懐かしい桑の大樹の下までたどりついた。

(中略)

「今まで、何千人、いや何万人となく、村を通る人々が、あの樹を見たらうが、誰もなんともいった者はいないかね」

「べつに……」

「そうかなあ」

「珍しい樹だ、桑でこんな大木はないとは、誰もみないますが」

「じゃあ、わしが告げよう。あの樹は、霊木れいぼくじゃ。この家から必ず貴人が生れる。重々ちゆうぢゆう、車蓋のような枝が皆、そういつてわしへ囁いた。……遠くない、この春。桑の葉が青々とつく頃になると、いい友達が訪ねてくるよ。蛟龍こうりゆうが雲をえたように、それからこの主はおそろしく身の上が変わってくる」

「お爺さんは、易者かね」

「わしは、魯の李定という者さ。というて年中飄々としておるから、故郷にいたためしはない。山羊をひっぱって、酒に酔うて、時々、市へ行くので、皆が羊仙といたりする」(中略)

「では、永く」

「変わるまいぞ」

「変らじ」

と、兄弟の杯を交わし、そして、三人一体、協力して国家に報じ、下万民の塗炭(とたんの苦(く)を救うをもつて、大丈夫の生涯とせんと申し合った。

張飛は、すこし酔うてきたとみえて、声を大にし、杯を高く挙げて、

「ああ、こんな吉日はない。実に愉快だ。再び天にいう。われらここにあるの三名。同年同月同日に生まるるを希(ねが)わず、願わくば同年同月同日に死なん」

と、呶鳴った。そして、

「飲もう。大いに、きょうは飲もう——ではありませんか」

などと、劉備の杯へも、やたらに酒をついだ。そうかと思うと、自分の頭を、ひとりで叩きながら、「愉快だ。実に愉快だ」と、子供みたいにさげんだ。(引用終わり)

【ただ使君と操とのみ】十八史略

車騎將軍董承、稱受密詔、与劉備誅曹操。操一日從容謂備曰、今天下英雄、唯使君与操耳。備方食。失匕筋。值雷震詭曰、聖人云、迅雷風烈必變。良有以也。

車騎將軍董承(とうしよう)、密詔を受くと稱し、劉備と曹操を誅せんとす。操、一日、從容(しようよう)として備に謂ひて曰く「今天下の英雄は、唯、使君(しくん)と操とのみ」と。備方(まさ)に食す。匕筋(ひちよ)を失す。雷震に値(あた)りて詭(いつは)りて曰く「聖人云ふ、迅雷風烈には必ず變ず、と。良(まこと)に以(ゆる)る有るなり」と。

「いなびかりまでは玄德箸を持ち」柳多留25篇

(吉川英治『三国志』臣道の巻より)

「それらはみな碌々(ろくろく)たる小人のみで論ずるにも足らん。せめてもう少し、人間らしい恰好をしたのはおらんかね」

「もうその余には、わたくしの聞き及びはありません」

「情けないことかな、それ英雄とは、大志を抱き、万計(ばんけい)の妙を蔵し、行つて怯まず、時潮におくれず、宇宙の氣宇、天地の理を体得して、万民の指揮にのぞむものでなければならん」

「今の世に、誰かよく、そんな資質を備えた人物がおりましょう。無理なお求めです」

「いや、ある!」

曹操はいきなり指をもって、玄德の顔を指さし、またその指を返して、自分の鼻をさした。

「君と、予とだ。今、天下の英雄たり得るものは大言ではないが、予と足下の二人しかあるまい」

そのことばも終らないうちであった。

ぴかっ——と青白い雷光(いなびかり)が、ふたりの膝へ閃いた、と思うと、沛然たる大雨と共に、雷鳴がとどろいて、どこかの太木にかみなりが落ちたようであった。

「——あッ」

玄德は、手にしていた箸を投げ、両耳をふさいで、席へうつ伏してしまった。

それは天地も裂けるような震動だったにちがいないが、余りな彼のおののきに、席にいあわせた美姬たちまで、

「ホ、ホ、ホ、ホ」と、笑いこけた。

曹操は、疑った。しばし顔も上げないでいる玄德を、きびしい眼で見ている。しかし美姬たちまであざけり笑ったので、思わず苦笑の口もとをゆがめ、

「どう召された。もう空ははれているのに」と、いった。

玄德は酒も醒め果てたように、

「ああ驚きました。生来、雷鳴(かみなり)が大嫌いなものですから」

「雷鳴は天地の声、どうしてそんなに怖いのか」

「わかりません。虫のせいでしょう。幼少から雷鳴というと、身をかくす所にいつもまごつきます」

「……ふうむ」

曹操はとうとう自分の都合のよいように飲んだ。玄德の人物もこの程度ならまず世に無用な人と観てしまったのである。……彼の遠謀とも知らずに。

【髀肉の嘆】十八史略

嘗於表坐。起至厠。還慨然流涕。表怪問之。備曰、常時身不離鞍。髀肉皆消。今不復騎。髀裏肉生。日月如流、老将至、功業不建。是以悲耳。
嘗て表の坐に於て、起ちて厠に至る。還りて慨然として涕を流す。表、怪しみて之を問ふ。備、曰く「常時、身、鞍を離れず。髀肉、皆、消す。今、復た騎らず。髀肉、生ず。日月は流るるが如く、老いの將に至らんとするに、功業、建たず。是を以て悲しむのみ」と。

(吉川英治『三国志』孔明の巻)

すると或る折、酒宴の半ばに、玄德は厠へ立って、座に帰ると、しばらくのあいだ黙然と興もなげにさしうつつ向いていた。

劉表はいぶかって、

「どう召されたか。何ぞ、わしの話でも、気にさわられたか」と、たずねた。

玄德は面を振って、

「いえいえご酒宴を賜りながら、愁然とふさぎこみ、私こそ申しわけありません。仔細はこうです。ただ今、厠へ参って、ふとわが身をかえりみると、久しく美衣美食に馴れたせいでしよう、髀(もも)の肉が肥えふくれて参りました。——かつては、常に身を馬上におき、艱苦辛酸を日常としていた自分が——ああ、いつのまにこんな贅肉を生じさせたろうか。日月の去るは水の流るる如く、かくて自分もまた、なすこともなく空しく老いて行くのか……と、ふとそんなことを考えだしたものですから、思わずわれとわが身を恥じ、不覚な涙を催したわけでした。どうか、お心にかけて下さい」と、詫びて、臉をかくく指の腹で拭った。

劉表は、思い出したように、

「そうそう、ずっと以前、許昌の官府で、君と曹操と、青梅の実をとり酒を煮て、共に英雄を論じた時、どちらが云ったか知らないが、天下の群雄もいま恐れるに足るものはない、まず真の英雄とゆるされる者はご辺と我ぐらいなるものであろう——と語ったそうだが、その一方の御身が、先頃からこの荊州に来ていてくれるので、この劉表もどんなに心強いかわれぬ」と、いった。

玄德もその日は、いつになく感傷的になっていたので、

「曹操如き何かあらんです。もし私が貧しくも一國を持ち、それに相応する兵力さえ持てば……」

と、つい口をすべらせかけたが、ふと劉表の顔色が変わったのに気づいて、後は笑いにまぎらして、わざと杯をかさねて大酔したふりをしてそこに眠ってしまった。

四

横になると、手枕のまま、玄德はもう大いびきをかき始めた。寝よだれを垂らして眠っている。

「……？」

劉表は、猜疑に囚われた眼で、その寝顔を見まもっていた。自分の住居の中に、巨大な龍が横たわっているような恐怖をおぼえたのである。

「やはり怖ろしい人間だ！」

彼もあわてて座を立った。

すると、衝立(ついたて)の陰にたたずんでいた妻の蔡夫人が、ふと寄り添って囁いた。「あなた、いまの玄徳のことばを、何とお聞きになりましたか。常には慎んでおりましても、酔えば性根は隠せません。本性を見せたのです。わたしは、恐ろしさにぞくぞくしました」

「……うむ」

劉表は、呻いたきり、黙然と奥の閣へかくれてしまった。

良人の煮えきらない容子に蔡夫人は焦々(いらいら)しく思った。だが、良人はもう充分、玄徳に疑いを抱いていることは確かなので、急に兄の蔡瑁(さいぼう)を呼んで、

「どうしたものである」と、はかった。

【三顧の礼】十八史略

瑯琊諸葛亮、寓居襄陽隆中。每自比管仲・楽毅。備訪士於司馬徽。徽曰、識時務者在俊傑。此間自有伏龍・鳳雛。諸葛孔明・龐士元也。徐庶亦謂備曰、諸葛孔明臥龍也。備參往乃得見亮、問策。亮曰、操擁百萬之衆。挾天子令諸侯。此誠不可与争鋒。孫權擁江東、国險而民附。可与為援、而不可凶。荊州用武之國、益州險塞、沃野千里。天府之土。若跨有荊・益、保其巖阻、天下有変、荊州之軍向宛・洛、益州之衆出秦川、孰不箠食壺漿、以迎將軍乎。備曰、善。与亮情好日密。曰、孤之有孔明、猶魚之有水也。

瑯琊(ろうや)の諸葛亮(しょかつりょう)、襄陽(じょうよう)の隆中に寓居す。毎(つね)に自ら管仲・楽毅に比す。備、士を司馬徽(しばぎ)に訪(と)ふ。徽曰く「時務を識る者は俊傑に在り。此の間、自ら伏龍(ふくりょう)・鳳雛(ほうすう)有り。諸葛孔明・龐士元(ほうしげん)なり」と。徐庶(じょしよ)も亦た備に謂ひて曰く「諸葛孔明は臥龍なり」と。備、参(み)たび往きて乃ち亮を見るを得、策を問ふ。亮曰く「操、百万の衆を擁し、天子を挟(さ)しはさみて諸侯に令す。此れ誠に与(とも)に鋒を争ふべからず。孫權、江東に拠有し、国、險にして民附く。与(とも)に援(えん)と為すべく、凶る可からず。荊州は武を用うるの国、益州は險塞(けんそく)にして沃野千里、天府の土なり。もし荊・益を跨有(こゆう)して其の巖阻(がんそ)を保ち、天下に變有らば荊州の軍は宛(えん)・洛(らく)に向かひ益州の衆は秦川(しんせん)に出でなば、孰(たれ)か、箠食壺漿(たんしこしよ)して以て將軍を迎へざらんや」と。備曰く「善し」と。亮と情好、日に密なり。曰く「孤の孔明有るは、猶ほ魚の水有るがごとし」と。

川柳

「今日もまた留守でござると諸葛亮」柳多留26篇

「孔明も三回目から帯をとき」柳多留拾遺4篇

頼山陽「詠三国人物十二絶句」

(吉川英治『三国志』赤壁の巻)

至誠は人をうごかさずにおかない。玄徳は天下の為に泣くのであった。その涙は一箇

のためや、小さい私情に流したのではない。

「……………」

孔明は、沈思しているふうだったが、やがて唇を開くと、静かに、しかし力づよい語韻でいった。

「いや、お心のほどよく分りました。もし長くお見捨てなくば、不肖ながら、大馬の勞をとって、共に微力を国事に尽しましょう」

聞くと、玄德は、

「えつ。では、それがしの聘（へい）に応じて、ご出廬（しゅつろ）くださいますか」

「何かのご縁でしょう。將軍は私にめぐり会うべく諸州をさまよい、私は將軍のお招きを辱（かたじけ）のうすべく今日まで田野の廬（ろ）にかくれて陽の目を待っていたのかも知れません」

「余りにうれしくて、何やら夢のような心地がする」

玄德は、関羽と張飛を呼んで仔細を語り、また供に持たせてきた金帛（きんぱく）の禮物を、

「主従かための印しるしばかりに」と、孔明へ贈った。

孔明は辞して受けなかったが、大賢（たいけん）を聘すには礼儀もある。自分の志ばかりの物だからといわれて、

「では、有難く頂きましょう」

と、家弟の諸葛均（しよかつきん）にそれをおさめさせた。

（中略）

玄德は孔明とひとつ車に乗り、新野の城内へ帰る途中も、親しげに語り合っていた。

このとき孔明は二十七歳、劉備玄德は四十七であった。

新野に帰ってからも、ふたりは寝るにも、室を共にし、食事をするにも、卓をべつにしたことがない。

昼夜、天下を論じ、人物を評し、史を按じ、令を工夫していた。

孔明が、新野の兵力をみると、わずか数千の兵しかない。財力もきわめて乏しい。そこで劉備にすすめた。

「荊州は、人口が少ないのでなく、実は戸籍にのっている人間が少ないのです。ですから、劉表にすすめ、戸簿を整理し、遊民を簿冊（ぼさつ）に入れて、非常の際は、すぐ兵籍に加え得るようにしなければいけません」といった。

また自分が、保券の証人となって、南陽の富豪大姓隗氏（たいせいぼうし）から、錢千萬貫を借りうけ、これをひそかに劉備の軍資金にまわして、その内容を強化した。

とまれ、孔明の家がらというものは、その叔父だった人といい、また現在呉に仕えている長兄の諸葛瑾（しよかつきん）といい、彼の妻黃氏（こうし）の実家といい、当時の名門にちがいがなかった。しかも、孔明の誠実と真摯（しんし）な人格だけは、誰にも認められていたので——彼を帷幕（いぼく）に加えた玄德は——同時に彼のこの大きな背景と、他方重い信用をも、あわせて味方にしたわけである。

遠大なる「天下三分の計」なるものは、もちろん玄德と孔明のふたりだけが胸に秘している大策で、当初はおもむろに、こうしてその内容の充実をはかりながら、北支・中支のうごき、また、江西・江南の時の流れを、きわめて慎重にながめていたのであった。